林 忠四郎先生の京都賞受賞

平成7年度京都賞を，京都大学名誉教授林忠四郎先生が受賞されました．私は，この度の授賞式，記念講演会，ワークショップと全て出席する機会を得ましたので，ここに報告することとします．

京都賞とは，1984年設立された稲森財団より，科学技術の発展と人間の精神的深化との調和のとれた未来を願い世界的な貢献をされた方々に贈られる賞であります．今年度は，材料科学の分野から液晶技術発展に貢献された英国のグレイ博士，美術の分野から米国のリキテンスタイン氏，基礎科学部門での地球科学・宇宙科学分野から，林忠四郎氏が京都賞を受賞されました．写真1は財団会長の瀬島竜三氏から賞を受けておられる場面であります．

受賞理由は，原子核から流体力学に及ぶ基礎物理学の広範な知識・手法を宇宙現象の解析に導入して星の進化や太陽系の起源等の研究に新しい局面を開き，天体の諸現象を理論的に解明することにより，現代宇宙物理学の発展に多大な貢献を成し遂げたとあります．先生の研究成果であります「林フェイズ」や，太陽系形成論は，現在，Tタウリ型星周辺の原始惑星系円盤の観測的進展から，2重に注目されており，実に時期を得た受賞であるとお喜びすると共に，日本人の受賞者が少ない同賞で受賞されたことは，日本の宇宙物理学の誉れとするところでもあります．

林先生は，これまで勲1等瑞宝章，文化勲章，エディントンメダル等様々な賞を受けられております．京都賞はその名誉の高さはもちろんですが，副賞の賞金の額だけはこれまでのいずれの賞も越えていると思います．授賞式も極めて絢爛豪華でありました．11月10日，京都国際会議場の大ホールにおきまして，高円宮同妃両殿下のご臨席の元に，各国の大使，総領事，各界を代表する人々で千人を越える出席者のまえで行われました．受賞者の生い立ちや受賞理由の紹介と共に，オーケストラの演奏有り，能舞台および合唱団のコーラス有りで極めて参加者にとっても，楽しめた式でありました．先生の若い人への言葉として，「簡単な

写真1　京都賞授賞式（11月10日）瀬島隆三会長より京都賞を贈られる．

ことから始めなさい．それを解決することによって，自信が付くから.」が紹介されましたが，若いときに聞いたことを思い出し，印象深いものがありました．自分も大学院生を持つ身となって，同様に思う次第であります．式の最後には，ご婦人と共にご家族も壇上にあがられ，歓喜の内に式典は終了しました．

さて，授賞式の夕刻には，都ホテルにおいて授賞祝賀会が催されました．千人を超える招待者のため，受賞者ははるか向こうの貴賓席であるため，先生にお祝いの言葉を伝えることもできません．そこで，少し図々しいとは思いましたが，中村卓史氏を誘って，正面の席まで入って先生に受賞のお祝いを述べました．先生は，「ありがとう．しかし，今回の受賞で失敗したと思っていることがあるんだ！」とおっしゃるではありませんか．「受賞者は，明日，一般の聴衆の前で自身の成果について発表することになっているんだ．もちろん，私の場合，星の進化の話をしなければならないが．君ね，星の進化には，物質の縮退を抜きにしては語れないだろ．ところが，この縮退を，いかにして説明するかが問題なんだ．君たち，縮退を簡単に説明する方法をしらんか.」我々，その難しさを認識するところでありましたが，先生らしさを改めて実感する次第でありました．

次の日，さてどのように説明されるかと楽しみに講演会に出席したのでありました．先生は，自身の研究は，高校までの教科書に載っているレベルではこれからの話は少し難しいとの前置きをされた後，縮退について丁寧に説明されました．ただ，それに時間を使われたせいか，時間がなくなり，太陽系の形成の話は省略せざるを得なくなりました．先生の持論であるミクロの物理の蓄積で，いかにマクロな星などの構造を説明できるかを一般の聴衆に訴えたかったのだと思いました．ただ，どれだけの人が理解できたかは定かでありませんが．

最終日は，受賞記念ワークショップが開かれ，

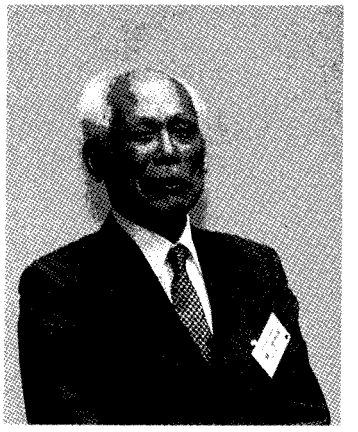

写真2　記念ワークショップで基調講演されるところ．　(11月12日)

佐藤文隆氏の総合司会の元に，杉本大一郎，中沢清両座長進行で，林忠四郎先生の講演（写真2），野本憲一，海部宣男，井田茂，水谷仁各氏の研究発表が行われました．林先生は未だに研究面では現役であり，Tタウリ型星の星風や進化過程について最近の研究発表をされました．全く頭が下がる思いであります．先生は，京都大学退官記念講演でも，過去を振り返ることはされず，これからどういう研究をしたいという内容でありました．休憩時間に，「先生の理論では，角運動量の輸送率が，観測で言われているより早くなりませんか？」とたずねると，熱心にその根拠を聞かれました．まだまだお元気な先生でありました．

以上が，授賞式とその一連の会議の模様であります．先生がこれからも健康に留意されて，研究を続けられることを願って筆を置きたいと思いますが，新聞によりますと，賞金の一部は学会に寄付されるということで，どの学会であろうかと気になるところであります．

（観山正見　国立天文台）